備える 3.11から

第200回 語り部・報道座談会㊦

「災前の策」伝え続ける

名古屋大名誉教授	福和伸夫さん(65)
テレビ岩手	遠藤　隆さん(66)
東日本大震災 語り部	川崎杏樹さん(25)
阪神淡路大震災 語り部	米山未来さん(27)
オナガワエフエム	大嶋智博さん(48)
中日新聞 寺本政司 編集局長	青柳知敏 社会部長

「備える　3・11から」の二百回特集として、震災の語り部やメディア関係者が「伝える」をテーマに語り合った座談会。後半では、南海トラフ地震が懸念される中部地方に、さまざまな教訓やメッセージが寄せられた。

■震災前に

福和　東北の方々は、あんなすごい震災になると思っていなかったかもしれない。それは、南海トラフ地震を前にしたわれわれと似た状況かもしれない。

遠藤　一九九四年十二月に三陸はるか沖地震という大きな地震があった。岩手県も被害があった。専門家が「地震の活動期に入った」と言ったのを鮮明に覚えている。すぐ後（九五年一月）に阪神淡路大震災が起き、「このことか」と思った。いつか何か起きると感じていた。

福和　遠藤さんが監督を務めたドキュメンタリー映画の中で、東日本大震災時にテレビ局の職員が懸命にロッカーを支えていた。

遠藤　固定していなかった。あの映像は社内で嫌がる人もいるけど、事実だからあえて使った。自分たちが被災者になるという感覚がなかった。

福和　対策まではできていなかった。

遠藤　伝えるための訓練もしたし、準備もした。でも、自分たちも被害に遭うということは全く考えていなかった。

川崎　地震について勉強はしていたが、岩手県に地震や津波が来るかもしれない、というところまでは正直、密接に考えていなかった。自宅の家具は転倒防止をしていなかった。

福和　震災前に戻れたら何を伝えたい。

川崎　二つあって、一つは何があっても絶対に逃げること。（六〇年の）チリ地震では「ここまでしか津波が来なかったから大丈夫」と思っていた人も多かった。まず一人一人が逃げる。そこを徹底してねと伝えたい。

もう一つは、自分の命がどこに行ったら守られるか、場所を確認しておいてほしいということ。岩手県釜石市鵜住居地区の防災センターでは多くの方が亡くなった。そこは津波の避難場所として指定されていないのに、避難訓練をしていたため、誰もが「逃げれば安全だ」と思っていた。

遠藤　（福島の原発が爆発したため、避難するよう）全員に連絡しようとしても携帯電話が通じない。無線だけが頼りで安否を確認することができた。震災時は便利なものやガソリンがなくなって動けなくなる。当たり前に思っているものが全部、失われる可能性がある。

福和　米山さんも阪神淡路大震災の語り部の父から「こうしておきたかった」という話を聞いているか。

米山　淡路島にも地震が来る、ということを地域の人は知らなかった。何の対策もしていなかった。家具の固定もしていなかった。防災グッズも用意していない。事前に準備しておくことが必要。防災教育もしっかりやっておくべきだったと言っていた。

メディアの形こだわらず

命 守れる避難場所 確認を

防災教育しっかり

■世代を超えて

福和　若い二人がメディアに言いたいこと、社会に期待することは。

川崎　防災教育がやりやすい環境を整えてほしい。自分たちは防災教育を受けていたから助かった。「防災ってやるのが当たり前」というくらいの感覚までの環境を。

米山　自分のライブ配信を通じて感じるのは、地震を経験していない年代が増え、防災に興味のない人が多いということ。「自分は大丈夫だろう」という思いがあって、語り部の話を聞きに行ったり、そういう施設に行ったりする動きにつながらない。関心を持ってもらう機会をまずは増やさないといけない。

福和　伝え続けるためにはどうすればいいか。

大嶋　既にメディアの形にこだわっている時代じゃない。震災で特に大事なのは、多くの人に届けばいいということ。ただ、意欲的に聞いてくれる人ばかりではない。なかなか届かないから広く伝える。メディアもネットの取り組みも、あきらめず伝え続けていくしかない。

語り部の中には残りの人生を全部、東日本大震災を伝えることにささげようと思っている人がいる。その人の手伝いをして、発信していくことが僕のライフワークとして続けていけることなのかなと思っている。

㊤プレハブのスタジオから放送する女川さいがいFMのスタッフ＝宮城県女川町で

■中部地方に

福和　中部地方の方々に送るメッセージを。

遠藤　南海トラフ地震は東日本大震災より激烈な形で起きる、と想像力を働かせるしかない。

福和　南海トラフ地震は繰り返し起きているので、少し勉強すれば過去に何があったか分かる。想像できるはずだから、ちゃんと考えようというメッセージ。

川崎　災害は必ず起きるととらえてほしい。備えていれば、助かる可能性も高まる。

青柳　「備える」の連載を始めたきっかけは、二〇〇二年四月に政府の中央防災会議が東海地震の対策強化地域を見直したこと。それまでは静岡県が中心だったが、愛知県や三重県、長野県で対象が広がった。翌月に連載を始め、百回を迎えた一一年五月にタイトルを「備える　3・11から」にした。いつか私たちは被災者になると覚悟している。その時に命を救うための連載。いざという時に役立つかもしれないと思って続けてきたし、続けていきたい。

寺本　皆さんは災害後の災後（さいご）で、われわれは災害前の災前（さいぜん）と言っていいかもしれない。「それぞれが別のことをやってもしょうがないな」とつくづく思った。そこを結ぶ災間（さいかん）という考え方を、中日新聞は持たなきゃいけないのかなと。災前にいるわれわれと、災後を経験された方がしっかりと話し合い、コミュニケーションを取りながら教訓として備え、伝えていくことが大事だと思った。

特集のインタビューと座談会の詳報（字幕付き動画）は、本紙の定期購読者向けインターネットサービス「中日新聞プラス」（登録無料）で見ることができます。

災とSeeing さいとシーイング

▶15◀　三六災害

（岐阜県羽島市、愛知県一宮市）

水害 防いだ記憶刻む

水防記念碑を前に三六災害について語る名古屋大の中村晋一郎准教授＝岐阜県羽島市で

三六災害で冠水した道路＝愛知県の一宮市尾西歴史民俗資料館所蔵

一九六一（昭和三十六）年の六〜七月に起きた豪雨災害の「三六災害」。梅雨前線の停滞と台風の接近で発生した集中豪雨は、長野県南部など中部地方を中心に、全国に被害をもたらした。岐阜県羽島市小熊町に立つ「水防記念碑」は、その歴史の一端を物語る。

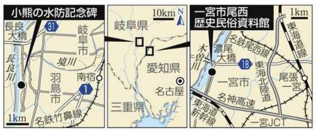
小熊では長良川の堤防の一部が百五十㍍にわたって崩れ、決壊寸前になったが、住民たちの活動で防いだとされる。名古屋大の中村晋一郎准教授（土木工学）は「決壊した場所に立つ碑は多いが、防いだことをたたえる碑は珍しい。地域の協力や準備の大切さを伝えている」と話す。

地元では今も水防団が活動を続けている。羽島市水防団小熊分団長の南谷好春さん（六五）は十五年前に入団し、訓練や河川水位の巡視に携わってきた。「ここ数年は河川の水位が上がることが増えてきた。水害は怖い。避難誘導などで助けになれば」と語る。

愛知県の旧尾西市（現一宮市）では、三六災害で小さな河川が越水した。家屋の被害は床上、床下浸水が六千三百戸を超え、市内の約八割が冠水した。一宮市尾西歴史民俗資料館は、冠水した道路や自衛隊の救援活動など、当時の写真をパネルで展示している。

同館の宮川充史学芸員は「写真を見ると辺り一面が水浸し。この地域は『ウールの尾西』と言われ、繊維業が発達していたが、被害は非常に深刻で、織機が浸水して工場をたたんだケースもあった」と説明する。東海地方は三六災害の二年前の五九年九月も伊勢湾台風に見舞われ、翌六〇年八月も台風で洪水が起きている。宮川さんは「何とか復興してきたところに三六災害が起き、人々は大変だっただろう」と推し量る。

今年も梅雨や台風で川などが増水しやすい出水期に入る。中村准教授は「自分たちの身近な所で、水路や川の場所、どこが危ないかを把握し、地域で連携して備えておくことが大切だ」と話す。



アクセス　**小熊の水防記念碑**　岐阜県羽島市小熊町西小熊。碑文には「小熊町民各位の結束した水防作業により（決壊を）未然に防止した。当地方の発展とともに永く記念される」との趣旨が記されている。

一宮市尾西歴史民俗資料館　愛知県一宮市起下町211。ＪＲ尾張一宮駅から名鉄バスに乗り起（おこし）停留所で下車、徒歩５分。月曜休館、入館無料。㊤0586(62)9711

CBCテレビによる動画はこちら

連載二百回特集は森川清志、横井武昭、出口有紀、福本英司が担当しました。次回は7月4日掲載予定。

(c).中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています